

**両親の不仲が子どもに与える影響**  
— 自己肯定感と家庭安心感の心理調査から —

○ 浦和大学 益子 行弘 (8044)

キーワード：子ども、親子関係、夫婦関係

**1. 研究目的**

両親の不仲が子どもに与える影響について、これまで臨床領域では研究が行われ、悪影響を及ぼすことが報告されており、低い自己評価や抑うつ、他者に対する基本的信頼感の欠如が生じる傾向があるといった報告もある (Baker, 2007)。しかしながら、一方の親の悪口を言うという行為が、それを聞いた子どもの心理に与える影響について、質的研究でケース検討はなされているものの、量的な研究はほとんど行われてこなかった。そこで今回、一方の親の悪口を聞かされた子どもがどのような影響を受けているのかを量的調査から検討することで、両親の不仲、とくに一方の親への悪口を子どもに聞かせるという行為が、子どもの心理に与える影響を明らかにすることを目的とした。

**2. 研究の視点および方法**

■調査対象者：東京都、埼玉県、新潟県、宮城県、山形県内の、小学4年生から高校3年生 108名を対象とした。内訳は小学生群 (9~12歳) 24名、中学生群 (12~15歳) 27名、高校生群 (15~18歳) 57名で、両親のどちらかによるもう一方の親の悪口について、リッカート法による4件法にて、「よく聞く」、「時々聞く」、「あまり聞かない」、「聞いたことがない」で回答してもらい、悪口を聞く群 (「よく聞く」と「時々聞く」) および悪口を聞かない群 (「あまり聞かない」と「聞いたことがない」) に分けた (表1)。

■調査内容：「自分自身について」、「今の生活について」、「他者との関係について」の3カテゴリー・計18項目について、「全然そう思わない」、「あまりそう思わない」、「どちらでもない」、「少しそう思う」、「とてもそう思う」の5件法にて回答してもらった。調査協力者の回答能力から判断し、調査は質問紙法および面接法を併用した。

**表1 調査対象者**

	悪口を聞く		悪口を聞かない	
	よく	時々	あまり	全く
小学生	4	11	6	3
中学生	6	13	7	1
高校生	15	27	11	4
計	25	51	24	8

(人数)

**3. 倫理的配慮**

本研究を遂行するにあたり、日本社会福祉学会「研究倫理指針」に基づき、倫理的配慮

を行った。個人情報には十分配慮し、研究以外には一切使用しないこと、研究に必要な個人情報および相談内容については外部に一切漏らさないことを厳守する旨を説明し、同意いただいた。

#### 4. 研究結果

各質問項目について、「全然そう思わない」を1点、「あまりそう思わない」を2点、「どちらでもない」を3点、「少しそう思う」を4点、「とてもそう思う」を5点として、群ごと、項目ごとに評定平均値を算出した。さらに、悪口を聞く群と悪口を聞かない群の群間に差はあるのか多重比較を行った。その結果、悪口を聞いている子どもたちは、聞いていない子どもたちに比べ、「自分はひとりぼっちだと思う」( $p<.01$ )、「自分は不幸だ」( $p<.05$ )、「家族と一緒にいるのは楽しい」( $p<.05$ )、「家にいると嫌な気分になる」( $p<.01$ )の項目で有意に値が高く、「自分が好き」( $p<.05$ )、「今の生活が好き」( $p<.01$ )、「将来は良い生活をしているだろう」( $p<.01$ )、「他の人と話すことは楽しい」( $p<.10$ )の項目で有意に値が低くなること が明らかとなった(表2および図1に示す)。

表2 各項目の評定平均値(群間有意項目)

項目	悪口聞かない	悪口聞く	
自分が好き	4.2	3.6	*
自分はひとりぼっちだと思う	1.3	2.1	**
自分は不幸だ(N)	1.7	2.5	*
今の生活が好き	4.4	3.6	**
家族と一緒にいるのは楽しい	3.7	4.3	*
家にいると嫌な気分になる(N)	1.5	3.2	**
将来は良い生活をしているだろう	4.5	3.6	**
他の人と話すのは楽しい	4.3	3.8	†

\*\* :  $p<.01$ , \* :  $p<.05$ , † :  $p<.10$

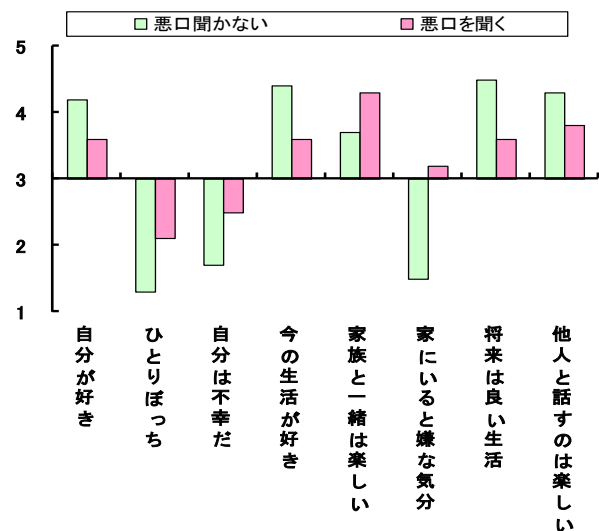


図1 各項目の評定平均値(群間有意項目)

#### 5. 考察

Fauber and Long (1991)は、夫婦の葛藤が、子どもの問題行動や抑うつ傾向、自傷行為などの引き金になることなど、子どもの心理に悪影響を及ぼすことを臨床研究の視点から指摘している。今回の調査でも、両親の悪口を聞いている子ども群に自己肯定感や家庭での安心感などにネガティブな判断傾向がみられたことから、量的研究においても、両親の葛藤が子どもの心理に悪影響を及ぼすことが示唆されたといえよう。

#### <引用文献>

- Baker, A.J.L.(2007). Adult Children of Parental Alienation Syndrome. *W.W.Newton & Company*.
- Fauber, R.L., & Long, N. (1991). Children in context: The role of the family in child psychotherapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 59,813-820.